

青梅市文化財ニュース

第340号

平成28年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

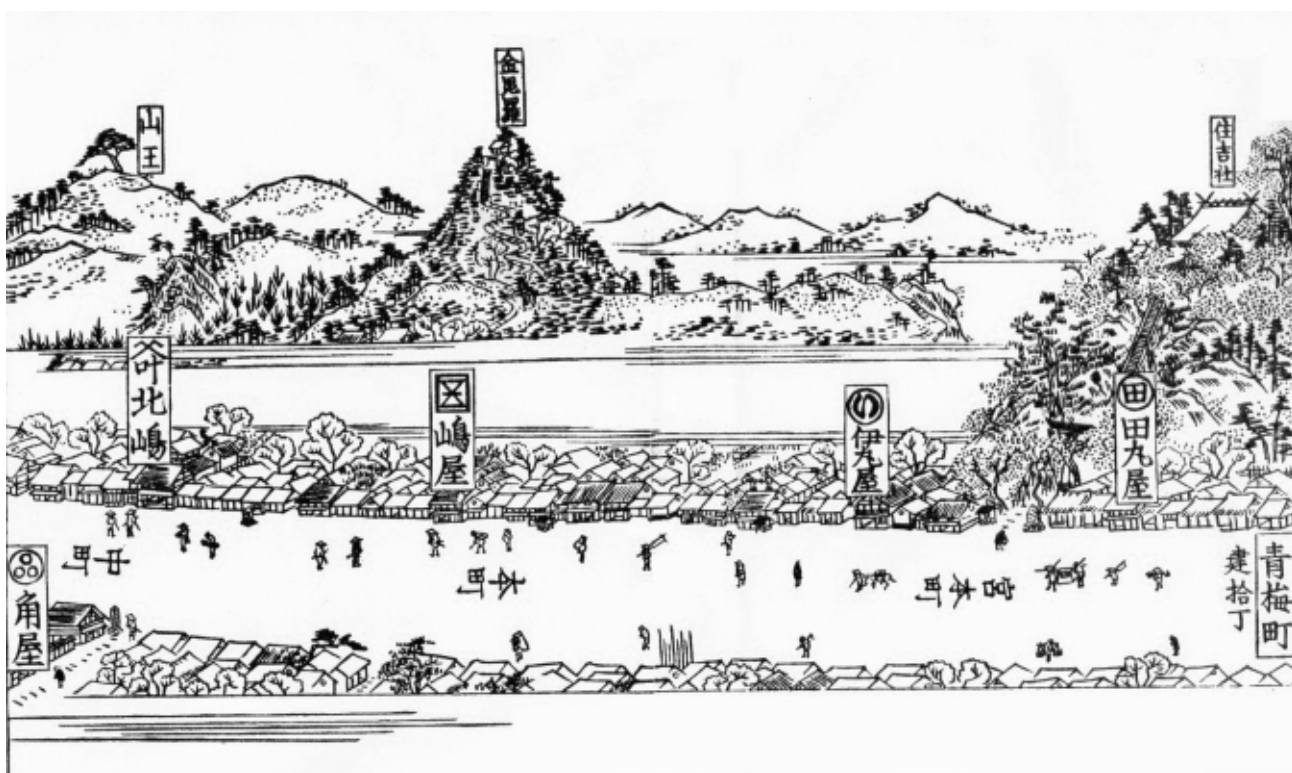
江戸時代後期の青梅宿（その2）

江戸時代後期の青梅宿の状況を描いた絵図として、天保5（1834）年に書かれた『御嶽菅笠』^{み たけすげ がさ}があります。『御嶽菅笠』は、江戸幕府神道方吉川家の学頭を務めた齋藤義彦の作で、版木は青梅市の有形文化財に指定されています。『御嶽菅笠』の内容は、新宿追分を出発点とし、途中の状況を簡単に紹介しながら、風景を描いています。下にある絵図は、その中の一枚です。

先の報告（本紙第333号）では、裏宿から仲町付近までの状況を紹介しました。今回はその東部で、仲町から住江町までを紹介します。

絵図の左端にある「角屋」の三差路は、青梅図書館入口の信号がある三差路から4軒で、「カバンの近江屋」の位置です。近江屋の南隣では、かつて「かどや洋服店」が営業していました。この三差路は、青梅宿から平井宿や五日市宿へ向かう街道の入口でした。

三差路から先へ進み、瀧の上児童遊園で街道は右折。左手に常保寺を見ながら先へ進む



と、「大横町」と称される、現在の大通りに出ます。昭和36年頃まで、児童遊園の敷地には公共職業安定所があり、また大通りの左手には青梅税務署がありました。職業安定所や税務署があったと言うことは、このコースが幹線道路であったことを、意味しているのでしょう。昭和20～30年頃の付近の状況については、『青梅市文化財保護指導員連絡協議会活動報告書』の第28号に詳しく記載しています。

絵図で、「角屋」の北側にある「北嶋」は、かつて「りそな銀行 青梅プラザ出張所」の東隣で営業していた「福屋」です。「嶋屋」の位置が、現在の何処に当たるかは明らかではありませんが、南側に横町の入口が描かれていることから、「青梅駅前」の交差点付近でしょう。

青梅宿の背後には、金毘羅神社が祀られている山が聳えています。現在でも神社は近隣の住民たちの信仰を集め、また展望も良いことから、参拝者が多く訪れています。敷地の一角には、「十二方角名所碑」が建っています。台座の上に乗る碑は、高さ約127cmで、周囲は十二角です。十二のそれぞれの面に、十二支が彫られ、その下に山名や距離などがあります。基部に「寛政九丁巳秋」とあることから、1797年に創立されたことが分かります。

伝えられるところによると、金毘羅神社は寛政9年の創立であることから、創立に際して、宿の好事家たちが奉納したと考えられます。『御嶽菅笠』が著された天保5（1834）年から、まだ30年余と、歳月も余り経ていないことから、神社の家屋や石碑も、まだ立派であったのでしょう。

「伊丸屋」の左側には路地が描かれています。この路地は、白木屋呉服店前から永山グラウンドへ向かう、かつてのキネマ通りでしょう。先報（本ニュース第333号）で述べた通り、梅岩寺前から白木屋まで街道の中央を水路が貫通していましたが、この絵図にも描かれていません。

住吉社（神社）の前一帯は、新宿と称したり住江町と言ったりしていますが、絵図では「宮本町」となっています。「田丸屋」は現在の萩原洋品店、それとも西隣にある昭和幻燈館でしょうか。

絵図の右端に「青梅町」「建拾丁」と並んで書かれています。この建拾丁は縦十町でしょう。青梅宿の東端を南北に流れる別当沢に架かっていた橋から、西端にあった森下陣屋までの距離と考えられるため、手元にある住宅地図で距離を測ってみると、約1,120mでした。1町（丁）を60間＝約109mとして換算すると、約1,090mになり、約30mの誤差にすぎません。

（文責 角田清美）